

特集：困難事例とカウンセリング

Feature Papers: Difficult Cases and HIV Counseling

エイズ学会が発足して2016年で30年目を迎える。HIVはその当初から医学的、疫学的な側面だけでなく、社会問題としても大きく取り上げられた。カウンセラーも薬害、性的マイノリティ、エイズノイローゼ、陽性告知支援、検査・予防啓発への関わりなど、これまでにない医療領域での役割を求められてきた。現在、医学は進歩し、死亡率は低下した。しかし臨床現場では診療が長期化した分、通院の途絶、うつやドラッグユースなどで、困難化する事例も目立つようになった。今回はこうした事例を特集し、チームの一員としてカウンセラーは何を考え、どう対応したのかについて特集を企画した。

喜花伸子の「服薬継続が困難であった薬害 HIV 患者のカウンセリング事例」は、薬害 HIV が騒がれた頃のカウンセリング事例であるが、そこに記述された内容は現在も多く薬害被害者の方の底流に流れているものと共通する。薬害被害者の気持ちを知るため、初学者のメディカルスタッフにもご一読願いたい。

阪木淳子らの「内服困難事例へのチーム支援におけるカウンセラーの役割」は同じ服薬困難をテーマにしているが、認知機能の低下、病棟での対応、情報の共有化やチーム医療の中でのカウンセラーの課題など、現代的な問題を捉えている。すでにチーム医療体制が構築されたなかにも参考になろう。

森 祐子らの「HIV 感染症罹患に伴う喪失体験から抑うつ症状を呈した1例」では感染者に多い、うつを取り上げた。内因性でなく、ストレス反応や情緒的反応としてもうつは生じるが、ここでは告知が起こした自己イメージの損傷による「対象喪失」をキーワードにカウンセリングが行われた事例が紹介されている。

渡邊愛祈は「HIV 拠点病院における薬物依存患者へのカウンセリング— SMARPP プログラムを導入した事例—」で、物質依存の問題をとりあげた。覚せい剤などは医療ではなく、司法の問題であると忌避されることが多いが、今や HIV 感染者の臨床において避けて通れない。本稿は国内の薬物使用の現状とともに治療プログラム「SMARPP」を事例とともに紹介している。このプログラムは物質依存の対策として注目をあび、各地で実施可能な方法である。

松岡亜由子らの「治療を拒否して対応に難渋したニューモシスチス肺炎発症 AIDS の1例」は、表題どおり PCP の治療を拒否していた入院患者の事例である。医学において原因説明はそのまま治療法に繋がるのがほとんどであるが、ここで語られている共時性や心理的現実への記述はそれとは異なる。原因追求が解決法につながらないことが多い臨床心理士にとっては馴染んだものであるが、この世界が他職種にはどう映るのかも興味を持てる。

ご存知のとおり、心理領域での事例表記ではクライアントの行動や発言が心の動きを示す指標となる。さまざまな検査数値で状態を計る医療者には違和感があるかもしれず、表記を冗長に感じることもあろう。ここは細やかな心理を理解するための手段として寛恕いただきたい。読者には必ずや今後の臨床のヒントになることが見つかるであろう。なお、一部の事例は厚生労働科学研究事業 HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究 分担研究「HIV カウンセリングの普及および充実化に関する研究」の研修会において検討されたことをお断りしておく。

特集企画 担当編集委員 小 島 賢 一